

過ぎるほど立派な球場である。この球場が出来たおかげで、佐伯の野球熱が一段と燃え上がりつつあることは甚だよみこぼしいことである。この球場がよりよく有効に活用されて「野球王佐伯」の名を復活し、より一層の発展を祈って止まないものである。

(終)

研究

佐伯と國水田独歩 (山)

白坪・五所明神のあたり

山 本 保

独歩の作品「潔の羊生」の一部を紹介いたします。

(牧羊師) 交を出で、左に折れ、養籟寺(養登寺、禪宗)の門

前を過ぎて、直に野分に進む一路、右に溝あり、左は水田なり。

此の一路達して窮まるは家敷も十四、五に滿ため、鹽田と申す字。

また其の家々に及ばぬ程、一座の森左に在りて、裡に社(五所明神)あり、前に石の鳥居あり、石燈籠あり、大なる石橋溝にかかり、溝は此の辺に至りては甚だ広く水をたたへ、潮満つる時は小さき湖と形づく。

さて此の一路は好及てなす散歩の筋なり。秋更らば

紅葉、溝の兩岸に並ぶ、枝と枝と相接して溝を掩ふ。紅い水に映り、水、蒼空と映じ甚だ美觀と備ふ。人の家に遠く、何かの黙想をこゝ、おちらこちらと行ききして試みるに甚だ適へる近なり。

此の路を左に別れて二谷あり。一は静けき谷に導き、一は一個の村に導く。村を白坪と呼ぶ。此の路より眺むる時日佐伯より一世界と別つて作るか如し。山々麓にあり、村の背は直ちに小さき谷なり。右は山、左は山、前は水田、即ち此の路の右の田なり。此の道を行けば村人の声かすかに聞ゆ。子供の呼ぶ声聞かば聞ゆ。

雨降りたる夜の冬の朝、風なく、夜まぬくき沈静の朝、白雲元越山の谷をうづむ。

白坪村の朝煙しりり高く上り得ず、後の谷にこんもりとたなひき、黒く濕る藁屋より青き煙かゝるやかに上りて村の上を捲ふ。綿うゝ弦の音、例へ如く聞ゆれば今朝日濕りてきこえ、彼辺に一人、二人、彼辺の堤の上と二人、三人、村人入行もかふを見る。

老松の馬場へ松が枝より墮つる聲は昨夜の雨の音に似たり。田の地、籐の枝、を古き古き鳥籠をけに鳴くさすかに冬の朝なり。砂糖へく場所に通づれば、若者か小屋うちで鳴ぶ声聞ゆ。少女等の笑ふ声聞ゆ。牛の鼻息聞ゆ。

鹽田の鍛工(かじや)の前を過ぐれば、鉄槌の音已に朝の雲にひびく。

(注一) 此は各家で自家製造していたものと思われます。(注二) 當時、サトウキビも栽培していたものと思われます。現在沖後の二月はサトウキビの刈入れの最盛期にはいります。三三組余りにも仲介した弊の味には、ススキの穂をつくりに真の白い花の味も乱れます。明治二十六年、七年頃、佐伯の農家はサトウキビが

ら砂糖を製造していた。としよう。
(注三) 蟹田は、東山には元利家の別荘「松園」がありました。

蟹田——「源叔父」の作品より

蟹田なる鍛冶の夜業の火花、隣に散る前を行過んとして立ち寄り、日暮のころ紀州へを食、此前を通らざりしかば問ば、気つかざりしと横持てる若者一人、答へて訝しげなる顔す。この夜業を妨げぬと笑面作り、又急ぎかけり。

右は畑、左は堤の上き、一列に老松並ぶ真直の道を半ば来りし時、行先とゆくもあり、急ぎて燈火を手に向くるに、後姿紀州にまぎれなし。渠は両手と懐にし身を前に風めて歩めり。

鳥聲（フクロウ）——「豊後留佐伯」の作品より

其物淋しき声いまだ猶耳に在り。之れは城山の深樹にきき、之れと五所大明神の杜にきき、之れを馬場の松原にきき、而して冬へ夜きかざりして春の夕暮にきき、却て空心をなやましぬ。……
小児の時習ひ覚えたる如く十指を組みて笛となし、試みに彼の声と模して忘ずれば、彼更らに寂寞の調と以て答ふ。

左に独歩の日記を掲載します。

明治二十六年

十月二十四日（陸軍墓地）

本日昼飯前独り外出、招魂場（白坪）の石上に坐し、沈思するとこゝろあり。

十一月四日（白坪村）

午後登校授業す、四時帰宅、散歩に出づ。独り午

「白坪村（白坪村）の前を過ぐ。收穫（稲刈）の時季ゆゑ、農夫悉く野に在り。牛一匹より通する一路、堀に至りて他の道と合する辺は若者群衆せり。刈る女の群あり、のせつくる男あり、稲を打つ者あり。大さわぎ也。紅葉は夕陽をうけて美なること言ふべかりなし。牛一匹村へ後に當る山に登り夕陽の遠景を眺む。

十一月十四日

昨日午後牛一匹村（白坪村）を探検す。此の村の奥に墓地あり、山の谷間に在り、古墳累累として並ぶ。古き者且白苔之を覆ふ刻字を埋む。嗚呼此の村！此の村人々！此の墳墓！吾には大なる悲示（啓示）を如し。

(註) 昭和四十四年三月十日、羽柴、河野、佐根各委員は白坪の墓地を調査し、その時の様子を書き下すように依頼しています。

「白坪」奥に出かけると、古い慶寺の跡らしい一角に日六地蔵が並んでいる。
矢野、吉野と文字のある墓は佐伯士族らしいが、ほゞきりない。すなはち田舎新築の屋敷の墓がある。山内家の墓である由。
佐伯に珍らしい瑞霞が空け印塔を正面に、左右にズラリと各種各様の墓群が並んでいる。「經王宝蓮塔」とか「大乗妙典一世一字塔」など珍らしい。
少し登つたところには五所明神の社家橋佐古家の墓と知られる。
安永八年（和八代）守高儀奉誦の御影石の鳥居のある天満社前を経て、招魂所に参拜、更に中野の墓地にまわり、今泉元甫の墓や青木宗久の墓や元禄墓の群々を見る。

十二月一日

二十九日の薄暮、独り籠の道を散歩せし。天の雲は晩鐘雲に似た。白坪村暗くして燈未だ点せず。寂寥

と人声とは音として感慨に堪へざらぬ。

(註) 明治四十二年佐伯霊灯会社が許可されました。

十二月十九日

今朝早く起き、出でて冷水にて体と拭き、雪の如き霜を踏んで、櫓の堤より老松の馬場を散歩す。

(註) 独歩の下宿先坂本邸(山手区)前の道路と北東に進み、右利養賢寺に達します。

この道と北上すれば、右側下櫓の水と溝が並んで流れて、左に山麓に白坪村や毛利侯の守護神「五所明神社」と望みながら、蟹田御落に到着します。そこから、さくらに山裾沿いに平野、田の浦へと細い道が続く。葛巻へ出ることかてきまつた。

養賢寺から南東の道を進めば、老松の並ぶ「馬場通り」でした。旧藩時代は本馬場と呼ばれていた。(現在佐伯小学校前の道路と内馬場と呼ばれました。)

また養賢寺前の道と五十加ほど北へ行くと、岐路があらって、右手の道路をたどれば、白坪の陸軍墓地に到達しました。

途中の墓地群の中には、佐伯藩御披露高妻方洲の墓や、佐伯藩馬家久保田南産翁之碑(西暦1674年)後、藩政継承長萩宗兵衛三寺大警部(要請で休戦地帯を構いまく)がおります。

陸軍墓地近くの中野墓地(昔の避病院の下)には佐伯藩典医大代今泉元甫の墓があります。今泉元甫は、安井、唯泉、甘泉など三つの丹戸を佐伯藩に献上した医師です。

中野には、佐伯藩時代番所があり、白源八幡社近くにもクチャヤという番所がありました。中野から白源に出る道路(現代は火葬場へ通じている道)は、中野谷と呼ばれ、岡本田独歩がよく散策した場所です。

十二月二十二日(五所明神祭典) 独歩日記

佐伯は昨夜より祭日なり。五所大明神の祭礼なり。白坪村は昨夜より休息に入りぬ。今朝まき踊うへ音は聞えず、いつく男も見えず、晴衣着た多若衆、村女の徘徊するを見るのみ。

(明治二十七年) 三月四日

白坪村の梨をさぐる。山を攀じ、峰を涉りて宝林山下に至る。

三月三十一日

生徒詣子(鶴谷堂館)を伴い招魂所の櫻花、夕陽に輝き居たるを見て往いて見物す。

四月三日

故二(弟)と共に招魂場に散歩す。櫻花の美しさを感ず。

(註) 当時、招魂場は櫻の名所でした。現在は四五株あるのみで昔の面影はありません。

五所明神社の拜殿正面上には「正一位五所大明神」の額が掲げられています。

その左横に次の木札が目に付きます。

「本社ハ、平安朝ノ初期大同元年ハ西曆ハ〇六年ノ現在ノ地ニ創建。

賀茂、春日、稻荷、住吉、梅ノ宮各々社ノ祭神ヲ合祀シ、五所明神ト称シ奉ル。

慶長六年四月五日、毛利氏ノ祖高政公佐伯ニ封じラレシヨリ、藩内惣領守氏神ト定メタマイ、佐伯地方ノ人々ノ崇敬愈々、産業民生ノ神トシテ御神徳益々高ク座シマス。

奉祭ハ四月五日ヨリ三日間御神幸ノ大儀ヲ執行シ、夏祭ハ、七月十五日

冬祭(俗ニ甘酒祭)ハ、十二月十五日、佐伯神祭、特ニ湯立神祭ヲ奉納ス。

(註) 西側ノ稻荷社(赤イ鳥居アリ)ハ享保十二年(西暦一七三一年)本社境内ニ祀ル。一時城内(三ノ丸)ニ移シ、藩主親シク奉祀セシモ後、再び此処ニ復歸ス。

奉納 昭和四十三歳戊申御走

(註) 平安時代の氏と氏神の關係は左の通りです。

賀茂氏(賀茂神社) 藤原氏(春日神社)
藤原氏(熊河神社) 橋本氏(梅宮神社)

熊河神社の左に大きな女ナギの樹木が聳えています。そ
の近くには次へ石柱が立っています。

(正面文字)

ナギ 大分県指定天然記念物

(裏面文字)

大分県教育委員会

(左側面文字)

昭和三十六年二月十四日指定

(註) 弥生町江良河明寺、本五村井ノ上(宿善寺)
のなごも県指定の天然記念物です。ナギはまき科に属
し、常緑の直立高木で、皮水こいて栽培されています。

参道向って右側には善神宮があり、次の木札が掲げら
れています。

善神社

江戸時代、正徳元年(西暦七二年)創建。
木花咲耶姫神、

時鐘

子育の神安産の神として崇敬されている。
昭和四十三年戊申御走

皇紀二千六百二十九年

西暦一九六八年

奉納 井上長照 謹書

(註) 木花咲耶姫神は大山祇神(山の神様)の娘で、瓊々杵尊
(天照大神の孫)と結婚しました。

社前御影石の鳥居には「寛政三年、奉寄進、善神宮。当
城主従五位下伊勢守藤原朝臣高藤」の刻字が記されています。

あとかき

五所明神社宮司橋佐古寛四郎氏は、毛利家の財産管理
を担当されています。現在佐伯市社会教育委員長。

弥生町常盤井路を築造した出納藤左衛門の孫、出納藤
之丞定寛の妻は、四坪大宮司(五所明神社)橋佐古右京の
娘です。出納藤之丞定寛は、祖父の志を継いで常盤井路(
細田・平井・門田)の干渉の修築にあたりました。(会費
と藤田大氏の研究による)

最後に、佐伯ホケットニュース「青面赤面」の記事
を拜借して掲載いたします。

佐伯春まつりは県下各地の春まつり、桜まつりと同
様、佐伯市商店街が行事の中心を占め、本来の五所
明神社春まつり(四月五日より三日間)の御神幸の火熾
のおもかげはほしいに薄らいで、近年の御神幸には往
時の厳肅さが全く見られませんが、それは時代の反映で
南北の仕方がない。

これまで三の丸御殿はご神幸の中心(後宮)にな
っていたが、三の丸広場が市文化会館東設予定地にな
つたため、近く御殿が取り壊されることになり、おん
旅所も今春がぎりということになった。

昔のお祭出(おほまいて)ならぬ、どこまでか神様の中
心、市民は敬虔な気持ちでご神幸に奉仕したが、いまは
神賑行事なつた催物が中心、そこで催物コンクールと
なり、見物客、買物客をどの程度吸収できるかが春祭
の目安になつた。

しかし、こうした春祭もどうも制限界が狭い。また、催
物のマンネリ化、市、佐伯商工会議所共催の春祭

年号	西暦	てきごと
延暦 三	八〇五	最澄天台宗を伝える
大同 元	八〇六	空海真言宗を伝える
〃	二	五所明神社塩原村に創建
〃	八〇七	大宮八幡社戸穴村に創建
慶長 六	一六〇一	毛利高政(初代)五所明神社を銀寺氏神と定める
〃	一〇	毛利高政善賢寺創建
正徳 元	一七一〇	善神社を五所明神社境内に祀る
享保 一二	一七二七	稲荷社を五所明神社境内に祀る
安永 八	一七七九	毛利高標(第代高敏)臼坪天賜社に鳥居奉納
天明 元	一七八一	今泉元甫安井ノ井戸を造る
〃	七	今泉元甫米百石献上

参照年表

ありながら、祭典費が現在の物価に比べ少すぎると不踏や批判があらた。それではどういふらうか、どうなったらよいかとすると、誰も積極的な意見もあつちせない。

もともと、五所明神は佐伯城の鬼門に鎮座する鎮守社。最初は鶴屋、塩屋の地主神だったが、いつか佐伯城下の総氏神になった。

歴代毛利藩主の崇敬厚く、享保以降社家橋迫氏に領内各神社祠官の筆頭であつた。そうして歴史ももはや過去のものか。左が春祭は来た。(肥前、三、二四号)

(注) 三ノ丸御殿は稲頭所住吉神社近くに移築されています。

寛政 三	一七九一	毛利高敏(高標)五所明神善神宮に鳥居奉納
〃	一二	今泉元甫(七代)米上十石献上
文化 二	一八〇五	五所明神一千年祭奉行
〃	五	六代今泉元甫逝く
〃	一二	五所明神社境内に稲荷社を城中に移す
〃	一三	田ノ浦に塩田を造る
天保 一二	一八四一	八代今泉元甫五所明神社に狗吠走射寄進(国家安全のため)現存す
〃	一五	常盤井路改築者出御定寛没
文久 元	一八六一	高妻芳洲没
慶応 元	一八六五	五所明神社定上
明治 一一	一八七八	陸軍墓地に「東京警視隊原隊戦死之碑」建立
〃	一九	陸軍墓地に「敵愾ノ碑」建立
〃	二二	佐伯村を佐伯町と改称す
〃	二五	久保田南崖翁没
昭和 三六	一九六一	五所明神社「まぎ」大分県指定天然記念物となる
〃	四四	佐伯史談会(用柴・河野・佐殿)臼坪墓地調査